

規制改革と織田信長

昨年の国会は、郵政改革民営化が最大の焦点となりました。通常国会では参議院で否決、このため国会解散。衆議院議員選挙で自民党が大勝し、特別国会で可決、とまことに慌しい1年でした。

ところで、その議論の過程で、小泉首相の好きな歴史上の人物が「織田信長」だと報道され、首相と信長の比較論まで出てきました。加えて、アイススケートで、信長の17代目だという織田信成選手が大活躍、さらには、東京の新橋演舞場で、市川海老蔵が「信長」を演じて、小泉首相が観劇に駆けつけ話題となるなど、信長がちょっとしたブームとなりました。

ところで、織田信長とはどんな人物だったのか。信長については、これまで何度もテレビでドラマ化されたり映画化されたりしておなじみですが、そのほとんどは、信長の家臣が記したとされる「信長公記」に由来しているのです。

例えば、若き日の信長の風貌といえば、ざんばら髪を茶筌に結わえて、湯帷子を片肌脱ぎし、半袴をはいて、朱鞘の大刀を差していた。そして、町の通りを柿や瓜、餅などを齧りながら闊歩していたという、まことに行儀が悪い、変わった若者だった。と、そんな姿が、しばしばテレビや映画に登場しますが、確かに信長公記で、そのように描かれています。

もう一つ有名な織田信長の印象を記録した書物としては、戦国時代に日本にキリスト教の布教に来たリス・フロイスという宣教師が書いた「フロイスの日本史」があります。これは、フロイスが直接、信長にあって、外国人の目で客観的に観察したものであるだけに、リアリティがあります。例えば、信長は安土城の広間で、宣教師たちを招き、地球儀を見ながら南蛮の話聞き、宗教論を交わした様子が記録されています。また信長は、ポルトガル等西欧からの渡来品を好み、自ら、西欧風のマントや長靴を着用するなど“新し物好き”だったようです。

そんな信長ですから、古いしきたりや因習などが大嫌いでした。そこで例えば、それまで公家や社寺など古くからの領主に属していた商工業者の独占的な営業権を廃して、自由な商工業活動を推進しました。これは楽市楽座と呼ばれて有名ですが、天正5年(1577年)6月、安土で出された制札は、「安土城下中、楽市としたからには、諸座・諸役・諸公事など、すべて免許する」という書き出しで始まっているということです。新しい時代に向かったの信長竜規制緩和ですね。さしずめ、当時の清洲や安土などは、戦国版規制緩和特別区でした。

行政改革、規制改革は小泉内閣の最重要課題であり、昨年の郵政改革に続いて、今年は政府系金融機関の改革や特別会計改革等の改革が審議されます。また、私の専門分野である厚生労働関係では、医療制度改革が最重要課題です。ご承知のように、昨年、日本の人口はついに減少の時代に入りました。今後、約20年で現在の人口や1億2770万人が、1億人まで減少すると見込まれています。生まれる子供は、現在、年間120万人程ですが、やがて100万人を切るとされています。その一方、平成19年から、いわゆる団塊の世代が還暦に達し、定年年齢を迎えることが話題となっています。

信長の活躍した戦国時代から450年、明治維新から140年、そして今、戦後60年。超少子高齢社会を目前にした今、大きな節目の時にあることを感じます。

当時の信長公は、湯帷子の袖をはずし、半袴をはき、火打ち袋などをぶらさげ、髪は茶筌に結い、紅や萌黄の糸で結び、太刀は朱鞘のものを持ちいていた。配下は全員赤武者とし、市川大介に弓、橋本一巴に鉄砲、平田三位に兵法を学び、鷹狩を好んだ。行儀は悪く、町では人目も憚らず柿や瓜をかじり、餅を食い、人に寄りかかり、肩にぶらさがって歩いていた。その頃城下は穏やかで品のよいものであったから、この有様は大うつけとよばれるほかなかった。